

# 平成29年度中学入試

## [前期 B 入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて 16 ページあります。  
  
試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を上げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[前期 B 入試] 受験番号 \_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

次の文章は、「科学的に考える」とはどういうことを説明している文章の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

仮説はそのままでは言い放して終わってしまうので、何とかして確かめないとはいけません。この確かめ **a サギヨウ** のことを「検証」といいます。「検証」という語は、このように仮説の正しさを確かめるという意味に限って使ったほうが良いと思うのですが、最近では、とくに **A マスメディア** を中心として、**ずいぶん拡大解釈** されています。「振り込み詐欺の力ラクリを検証する！」みたいに、たんに詳しく調べる、という意味で使われることが多くなってきました。しかし、本来の使い方は「(注1)メントスとコーラを同時に飲むとおなか破裂する」というのは本当なのか検証してみた」のような、仮説の確かめを意味する使い方です。

ここからは、仮説を検証するためにはどういう実験や観察をすればいいのかという問題を中心に考えていきます。仮説に對して、**B やみくもに実験や観察をすればいいわけじゃありません**。仮説の検証にきちんとつながる実験や観察もあれば、そうでないものもある。

そのことを理解してもらうために、ちょっとしたゲームをやってみましょう。まず、私が三つの(注2)自然数を並べる一つの規則を心のなかに思い浮かべておきます。皆さんがその規則を当てるといってゲームです。

皆さんが三つの自然数の列を言い、その列が私の心のなかにある規則に当てはまっている場合、私はイエスと言います。当てはまらなかったらノーと言います。そうやって質問と答えをやりとりして行って、皆さんに私の思い浮かべた規則を当ててもらいましょう。最初にヒントを一つ出しておきます。「2、4、6」はイエスです。「2、4、6」は、私の頭のなかにある規則に当てはまっています。さて、**あなただったら次にどんな質問をするでしょうか**。だいたい次のようになるんじゃないかと思えます。

1、2、3はどうですか？

イエスです。「1、2、3」は私の頭のなかの規則に合致しています。どうですか？ 規則は分かりましたか？

一つめと二つめの数を足すと三番目の数になるといいうルールかなと思っただんですが。

なるほど。ではそれを確かめるために、ほかにどんな数字の列を私に尋ねればいいでしょうか。

1、3、4？

イエスです。

1、4、5はいかがですか？

イエスです。ここまでの質問で、確実に当てられたと言っているのですか？

ええ、确实とまでは言えないと思いますが、やっぱり一番目の数と二番目の数を足すと、三番目の数になるという規則じゃないかと思うんですが。

…… **ザンネン** ですが、このままだと何時間やっても当てられないでしょう。ここで挙げられた数字の列は、どれも私の頭のなかに持っていた規則に当たっています。でも、あなたが **スイソク** した規則は正解ではない。皆さんを **じらす** つもりはないので、「正解」を言いたくない。私の思い浮かべたルールは「三つの数がみんな違う」というものです。なーんだという声が聞こえてきますね。

では、なぜさきほどの **チヨウシ** で質問し続けても当たらないのでしょうか。質問者は、「2、4、6」はイエスというヒントを聞いて、 $2 + 4 = 6$ なので、一番目と二番目の数を足すと三番目の数になるという規則ではないかという仮説を立てました。そこでその後、「1、2、3」「1、3、4」「1、4、5」という例を次々に出してきたわけです。

これらは全て、【例ですね。そういう例を「正事例」といいますが、正事例だけを尋ねては、私の頭のなかにある規則は当てられません。そうじゃない例を出さないといけない。】

たとえば、【「】と試してみる。そうすると、私は「イエス」と言います。「三つの数がみんな違う」という規則には当たっていますから。でも、仮説と食い違っていますから、質問者は自分の最初の仮説を却下することになる。】

そこで「一番目、二番目、三番目と進むにしたがって、数が大きくなる」という規則かな」という新しい仮説を立てたとしても、この場合も、この仮説に合致する例を出し続けてはダメなんです。「2、7、5」といった具合に、仮説に合わないものを言わないといけません。こういうふうにしなないと、このゲームでは絶対に正解に **エタツ** しないんです。仮説に反する例を「反証例」といいますよ。

ところがこのゲームを行うと、多くの人は、自分が予測している仮説に当てはまる例を次々出してしまう。このことは、私たちの心に潜む重要な傾向性を明らかにしています。それは「確認バイアス」と呼ばれるものです。私たちは「こうじゃないかな」と思ってそれを確かめようとするときに、そこに当てはまる例ばかりを探してしまうのです。

たとえば「O型の人はおっとりしている」という仮説があったとする。「それって本当かよ？」と試みて確かめようとする、【人ばかり探してしまう。】

その結果、やっぱり血液型性格判断は当たっている、と思い込んでいます。本当は「人を探さなきゃいけない。いまやったのは、私の頭のなかにある規則を当てるというゲームでした。ここで、私の頭のなかを自然界だとします。そこにある規則は自然法則に当たります。そうすると、【は自然界の法則を探る科学者ですね。科学者は、この自然法則は何だろうと仮説を立てる。ゲームでの質問のやりとりが、【に当たります。つまり、【が仮説に当てはまる事例ばかり探すものだったら、自然界の法則に関する仮説が本当に正しいのかどうかは確かめられないのです。だから、仮説の確からしさを調べようと思ったら、仮説に当てはまる例と当てはまらない例の両方を調べないといけません。それをそれぞれ「検証条件」と「反証条件」といいます。

仮説の検証、つまり「確かめ」のためには、仮説の検証条件だけでなく反証条件をはっきりさせることが重要だということ、分かっていただけだと思います。このポイントは悪用することができます。つまり、反証条件をはっきりさせないことによつて、自分の仮説を反証から守り、いつまでも維持することができるようになります。

世間で言うところの「疑似科学」には、いくつの特徴があります。それを「疑似科学っぽさ」と呼んでおきましょう。「疑似科学」と呼ばれているものが、全ての疑似科学っぽさをもつわけではありませんし、f **セイトウハ**の科学とみなされている分野でも、ときどきこの疑似科学っぽさが見られることもあります。

で、疑似科学っぽさの一つとして、反証条件を明示しないということが挙げられます。どういう実験をやったとどういふことが起きたら、あるいはどういう観察がされたら、自分の仮説はまちがいになるのかということ、はっきりさせないのが疑似科学なのです。

(注1) メントス …… キャンデイの商品名。

(注2) 自然数 …… 1以上の整数のこと。

(戸田山和久『科学的思考』のレッスン』より。一部改めたところがある)

(一) 囲み文字  a f のカタカナを漢字に直しなさい。

a サギヨウ      b ザンネン      c スイソク      d チヨウシ      e タツ (しない)      f セイトウハ

(二) 波線部 A C のそれぞれの語句について、その意味を説明したものとしてみっとも適切なものを、それぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

A 「マスメディア」

- ア 国から国民に伝えたいことを知らせるための道具。
- イ 本当のことを知らせて、人々に注意をうながすもの。
- ウ たくさんの人に物事をつたえるなかだちとなるもの。
- エ 商品の特長をみんなに教えて、買ってもらうための広告。
- オ みんなが考えていることを集めて、未来を予想する研究。

B 「やみくもに」

- ア 悪い目的で                   イ こつそりと                   ウ 一生懸命けんめい
- エ ていねいに                   オ よく考えずに

C 「じらす」

- ア 少しだけ間違ったことをやらせて、失敗させる。
- イ 期待にわざとこたえず、いらいらさせる。
- ウ まちがえたことをからかって、不愉快ふゆがいにさせる。
- エ 相手の求めているものを考えて、すぐに実現させる。
- オ ほどほどに上手なうそをついて、思いこませる。

(三)

傍線部「ずいぶん拡大解釈かいしゃくされています」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 検証ということの重要性が認められて、今までにないほど広い分野で行われるようになったということ。
- イ 「検証」はくわしく調べるとい意味だったのに、仮説を確かめるとい意味にもなったということ。
- ウ 検証という言葉が、本来の意味を離はなれて、やたらと広く使われるようになってしまったということ。
- エ 検証とは仮説の正しさを確かめることなのに、現代ではその重要性が見過あごされているということ。
- オ 検証という言葉が正確に使おうということになり、意味の広がりを持たなくなってしまうということ。

(四) 傍線部 「あなただったら次にどんな質問をするでしょうか」とあるが、ここで筆者はどのような予想をしていると考えられるか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 「確証バイアス」にひっかかって、おそらくは、うまく正解にたどり着けないだろう。

イ きつちり仮説に当てはまる例を出し続け、時間はかかるが正解をみちびくだろう。

ウ 自分の仮説に当てはまらない例ばかりを出してしまっただけ時間をかけてもむだになるだろう。

エ 正解にたどり着くかそうでないかは人によって違うので、予想はまったくつかない。

オ いったんは「確証バイアス」にひっかかって、いずれは正解にたどり着くだろう。

(五) 空欄【<sup>くわらん</sup>】を、十字以内で補いなさい。ただし、「仮説」という語を必ず用いること。

(六) 空欄【<sup>くわらん</sup>】を補うのに適切な三つの数字の組み合わせを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 2、4、6    イ 2、2、7    ウ 1、3、5    エ 5、1、6

(七) 空欄【<sup>くわらん</sup>】を補う語句の組み合わせとして正しいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア O型なのにおっとりしていない    O型のおっとりしている

イ O型なのにおっとりしていない    O型でもないしおっとりしてもいない

ウ O型のおっとりしている    O型だけどおっとりしていない

エ O型のおっとりしている    O型でもないしおっとりしてもいない

(八) 空欄【<sup>くわらん</sup>】を文中にある三字の言葉で、空欄【<sup>くわらん</sup>】を文中にある二字の言葉で、それぞれ補いなさい。

(九) 傍線部 「このポイントは悪用することができます」とあるが、「このポイント」を「悪用」している例としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 本当は全く調べてもいないのに、「一万人のデータを集めて、人間の性格を分類しました」とにせ物の「性格判断」を作る。

イ たまたま身近にいるA型の人とB型の人の仲が悪いというだけで、「A型とB型は相性が悪い」という信頼性の低い「相性判断」を作る。

ウ 「あなたはまじめなときもあれば、なまけ者であるときもあります」と、ほとんどだれにでも当てはまるような「性格判断」を作る。

エ きちんとした根拠こんきよがないのにもかわらず、「A型あがたの人は絶対にまじめです」ときっぱり言い切るかたちの「性格判断」を作る。

(十) 本文の内容に合うものを、次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア メントスとコーラの実験のような、不まじめなものは検証する意味がない。

イ どんな実験でも、かならず仮説の検証に役立つとは限らない。

ウ 人間は、仮説を立てると、そこに当てはまる例ばかり探してしまう傾向を持っている。

エ 三つの数字の規則性を当てるゲームの例は、絶対に正しい仮説などないことを説明するために示された。

オ 反証条件をしっかりと調べることさえできれば、仮説の確からしさは完璧かんぺきに検証できる。

カ 反証条件を明示しているかどうかで、「科学」と「疑似科学」はきっぱりと二つに分けられる。

(十一) 次のそれぞれの問いに答えなさい。

いま部屋の中に、四人の人がいるとする。四人の人は必ず、お酒かジュースかのどちらかを飲んでいる。四人の状態について、今分かっているのは、次の表の通りである。空欄【A】～【D】が入っているところは、これから確かめないと分からない。

			Aさん	大人	【A】	飲み物
	Bさん	子ども	【B】			
	Cさん	【C】				お酒
	Dさん	【D】				ジュース

ここで、「子どもは必ずジュースを飲んでいる」という仮説を立てた。この仮説が正しいかどうかを確かめる場合、分からないところのうち、最低限どれを明らかにすればよいか。【A】～【D】の中から二つ選んで、記号で答えなさい。

いま机の上に、四枚のカードがあるとす。四枚のカードは、表面にはひらがなカタカナが、裏面には数字が漢字が書かれている。いま、机の上には表の通りのカードが並んでいる。反対側には何が書いてあるか、めくらないと分からない。

カードA	カードB	カードC	カードD	
ひ	ム	気	9	文字

ここで、「ひらがなの裏には必ず漢字が書かれている」という仮説を立てた。この仮説が正しいかどうかを確かめる場合、最低限どのカードをめくらなければいけないか。A～Dの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の元岡真葛は二十三歳。三歳の時に母を亡くし、父の元岡玄己は幼い娘を親友の藤林信太夫に預け、長崎に医術を学びに行ったまま行方知れず。しかしながら真葛は養父母である藤林信太夫妻の愛情を惜しみなく受けて育ち、その息子夫妻である藤林匡・初音も真葛を実の妹のように大切にしている。藤林家は代々幕府から命じられて、和漢の薬草を栽培管理する京都鷹ヶ峯・藤林御薬園を経営する家柄である。真葛も幼い頃から薬草の栽培・調薬に親しみ、また養父の藤林信太夫や在京の名医たちについて医術も学び、その調薬・医術の腕前は高く評価されている。先だっても当代きつての学者小野蘭山やその門弟たちについて関東に薬草採取の旅に出かけ、戻ってきたばかりである。

半年に及ぶ関東滞在を終えた真葛が、鷹ヶ峯・藤林御薬園に戻ったのは、六月の七日。採薬の旅と炎天下の東海道のせいで、前後が分からぬほど日焼けした真葛を見るなり、

「まあまあ、すっかり真つ黒になつて。去年の糸瓜水が、まだ残っているはずですわ。真葛さんは白粉を嫌がるから、せめて少しでも肌を白く戻さねば」と騒ぎ立てた兄嫁に、軽い不審を覚えなかつたといえは嘘になる。

だが四条の（注1）太物屋・久木屋の末娘として生まれ、藤林家に入った初音は、薬草一辺倒の真葛とは正反対に、実に女らしい人物。それだけに年頃の娘とは程遠い真葛の風体には、驚き呆れただけだろうと思つていたのが間違いであった。

数日身体を休め、以前のように御薬園に出ようとしたりした真葛に、

「それ以上日焼けしてはなりませんよ。薬園に出るなら、菅笠を被りなさい」

と、注意してきた彼女が、勝手に自分の縁談を進めていたと知つたのは、今日の朝餉の席であつた。

「縁談じやと」

「私の、でございますか」

驚いて箸を止めた匡と真葛に、給仕をしていた初音はふくよかな顎をゆっくりと引いた。

「そうです。以前は旦那さまも、真葛さんの嫁入りをあれこれ思案していらしたのに、最近はずっとそんなことも放りっぱなし。ならここは一つ、あたくしが計らうしかないでしょう」

初音の言う通り、匡も以前は、真葛の処遇について、さまざま頭を悩ましていた。

だが幼い頃から薬園を駆け回ってきた真葛の調薬の腕は、時に匡を凌ぐほど巧み。その上、薬草栽培にも長け、父の藤林信太夫や京中の名医たちの（注2）薫陶を受けた彼女を身近に眺めるうち、匡はこの義妹に平凡な女子の幸せを押し付けるのが正しいのか分からなくなってしまうたのであった。

当の真葛は形のいい面差しに紅も白粉もささず、一日じゅう薬園を走り回っている。そんな闊達な義妹の姿に、彼はいつしか、降るように持ち込まれる縁談を片っ端から棚上げするようになっていた。

「真葛さんは、この御薬園にはなくてはならぬお人。ですがもういい年頃なのに、いまだ（注3）眉も剃らず鉄漿もつけず……これではまるであたしくしたちが、わざと縁談を邪魔しているみたいではないですか」

商家の出である初音は天真爛漫で、こうと決めれば周囲の思惑を無視して**a** **ドクダン** 専行するきらいがある。不機嫌に黙り込んだ匡にはお構いなしに、真葛に向かって居住まいを正した。

「父が持つてきた、いいお話があるのです。お相手は、上京の（注4）鍼灸医・小笹汪齋さまのご子息で玄四郎さま。汪齋さまは元（注5）禁裏御典医・御園常尹さまのお弟子で、玄四郎さまも十年余り、御園家の門弟をお**b** **ツト**めだとうかがっています」

常尹は、真葛の鍼灸の師・御園常斌の実父。つまり師弟関係で考えれば、小笹汪齋は真葛の伯父弟子になるわけである。京都では医家同士の婚姻が非常に多く、その点から言えば、小笹家は、真葛の嫁ぎ先にはうつつけ。とはいえそれとこれとは、話が別だ。

「待つてください、義姉さま。わたくしはまだ、結婚なぞ」

「何を言っているのです。確かに真葛さんの生薬栽培や調合の腕は、あたしくもよく存じています。ですが女子の幸せは、子を産み、育ててこそもたらされるもの。このままあなたを藤林家に縛り付けては、ご**c** **センダイ**や真葛さんのお父上に面目が立ちませんわ」

その言葉に、真葛はふと、自分を御薬園に託して姿を消した父・玄巳のことを考えた。

医学の研鑽のため長崎に赴く途中で**d** **シヨウソク**を絶った彼なら、娘の縁談をどう考えたであろう。案外あっさり、「女子は医学など究めずともよい」と言い放つか、それとも関東まで採薬の旅に加わった熱心さを喜ぶか。

さりながらいくら思い巡らしても、記憶の底の父親の面差しはひどくおぼろげで、その声すら脳裏に浮かばない。

箸を握りしめたまま目を伏せたのを、納得したと勘違いしたらしい。初音は冷めた茶を替えながら、華やいだ声で続けた。

「とにかく一度、お目にかかつてはいかがかしら。ひと月もすれば、紅葉も見頃。(注6) 観楓に託けて、見合いの席を設けてもいいでしょう」

見合いなぞという風習は、元は町方のもの。家同士の結びつきを重視する武家や医家では、親類縁者の談合で縁組みが決められ、当事者同士は闇夜の不意打ちの如く、婚禮のその日によく顔を合わせるのが当たり前であった。

だが江戸に幕府が置かれて、二百年。長らく続く太平の世は、そんな厳しい風習をも軟化させ、最近では花見や芝居見物などに託け、こっそり両者を顔合わせさせることも珍しくない。

真葛もすでに、二十三歳。さりながら幼い頃から年上の(注7)荒子たちに囲まれ、友と呼ぶべき存在もなく過ごしてきただけに、己の先行きより、日々成長する薬草の方が気にかかる。

ちらりとうかがった匡の顔は不機嫌そうで、唇が【A】の字に歪んでいる。

当主であるかれが一言言えば、初音も真葛もその言葉に従わざるをえない。それにもかかわらず彼が無言を貫いているのは、この件は真葛自身が決断を下すべきと考えているからだろう。そう気付いた瞬間、真葛は自分でも驚くほどの大声で、義姉の言葉を遮っていた。

「私はまだ、祝言する気はございません。申し訳ございませんが、このお話、お断りいただきたく存じます」

真葛は芯は強いが、他人に対して滅多に険しい物言いをしない。それだけに初音はおるか、大人に混じって膳を囲んでいた甥の辰之助までもが、ぎよつと顔を強張らせた。

「ま、真葛さん。そう言わず、よく考えてごらんなさい。そりやあなたさえその気になれば、いいご縁談は降るほどあるでしょう。ですが御園家のご縁からいっても、こんな誰からも喜ばれるお話はそうそうあるものじゃないですよ」

「この縁談が嫌なのではありません。今はまだどなたにも、嫁ぐ気がないと申しているのです」

取りつく【B】のない態度に、初音がつかつかと鉄漿の光る口を開けて絶句する。なぜかその顔に自分でも**フシギ**なほどの腹立ちを覚え、真葛はほとんど手付かずの膳を蹴立てて立ち上がった。

「このお話はなかったことに願います。祝言の相手ぐらい、自分で探しますから」

夫や子の息災だけを心の支えに日々を送る初音は、京女には珍しくからとした気性で、血の繋がらぬ真葛を実の妹のように可愛がってくれる。実際、先日の真葛の江戸(注8)出府に際しては、奥州平泉に下る源義経が旅の平安を祈願した首途八幡宮まで自ら出向き、守り札をもらってきてくれもした。

それだけに今回の縁組みも、あくまで真葛を思いやってのこととは承知している。

だが京都に戻ってからこの方、そうやって己の生きる世界に何の疑問も抱かぬ初音を、真葛は時にうらやましくも疎ましくも感じていた。

小野蘭山やその門弟たちとも経巡った、関東の野山。そこで触れた実学は、真葛にこれまで自分が学んできた学問の浅薄さ  
と、(注9)本草学の奥深さをさまざまと告げ知らせた。如何に薬草の栽培に長け、生薬の調合に通じておるうとも、この世にはまだ自分の知らぬ植物が数えきれぬほど存在する。これから先、どうやって深遠なるその世界に足をふみいれるべきかと迷っている自分に比べ、初音は自らの暮らし以外には全く目を向けようともしない。

果てしない学問の道を追い続けるのは、深い水底に閉じ込められたかのように苦しく、辛い。さりながら端っから向学心など持ち合わせぬ初音には、真葛の焦燥や苦しみは到底理解できぬであろう。

(わたくしもしいつそ義姉さまのように生きられたら、楽なのでしようなあ)

(注1) 太物屋：木綿や麻などの太い糸で織った織物をあつかう商店。

(注2) 薰陶：すぐれた徳で人を感化し、育てること。

(注3) 眉も剃らず鉄漿もつけず：結婚適齢期の女性や既婚女性は、眉を剃り、歯を黒く染めるのが、当時の風習であった。

(注4) 鍼灸医：鍼を打ったり、灸を据えたりする漢方の医者。

(注5) 禁裏御典医：宮中の医者。

(注6) 観楓：紅葉観賞のこと。

(注7) 荒子：主に力仕事に従事する使用人。

(注8) 出府：地方から江戸へ行くこと。

(注9) 本草学：薬草に関する学問。

(澤田瞳子『師走の扶持 京都鷹ヶ峯御薬園日録』より「撫子ひともと」一部改めたところがある。)

(一) 囲み文字 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ドクダン      b ツト(め)      c センダイ      d ショウソク      e フシギ

(二) 傍線部「まあまあ、すっかり真っ黒になって。去年の糸瓜水が、まだ残っているはずですわ。真葛さんは白粉を嫌がるから、せめて少しでも肌を白く戻さねば」とあるが、初音がこう言った理由としてもっとも適切なものを次のア

オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 年頃の娘とは程遠い真葛の風体に、びっくりしてあきれかえってしまったので。

イ 自分の言いつけを守らないでひどく日焼けした真葛に、強い嫌悪感を抱いたため。

ウ 縁談をひそかに進めていて、見合いの席で真葛をよく見せようと思っていたため。

エ 日焼けが体によくはないということを義妹に何とか伝えたいと思っていたため。

オ 女だてらに学問を究めようとする義妹に遠回しに意見してやろうと考えたため。

(三) 傍線部「縁談じゃ」とあるが、匡は真葛の縁談についてどのような態度をとっているのか。その答えとしても適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 縁談を進めることが真葛にとって本当に良いことなのかどうか判断がつかずに迷っている。

イ 生薬の栽培や調薬が得意な真葛に似合った結婚相手をなんとか探してやりたいと思っている。

ウ 真つ黒に日焼けするなど女性としての魅力に欠ける真葛に縁談は無理だとあきらめている。

エ 真葛の縁談について、以前はいろいろと考えていたが、今は妻の初音にすべて任せている。

オ 生薬の栽培や調薬の腕を磨くことしか頭がない真葛の気持ちを探して、縁談はすべて断っている。

(四) 傍線部「これではまるであたくしたちが、わざと縁談を邪魔しているみたいだ」と言っているのか。その答えとしても適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ただでさえ少ない縁談の話すべて棚上げしていること。

イ 真葛の嫁入りよりも辰之助の教育に熱を入れていること。

ウ 結婚適齢期なのに女らしく振る舞うことを禁じていること。

エ 真葛のために気に入らない縁談をすべて断ってきたこと。

オ 真葛に藤林家の仕事である薬草の栽培や調薬をさせていること。

(五) 傍線部 「不機嫌ふきげんに黙だまり込んだ匡」とあるが、なぜ匡は黙り込んだのか。その答えとしてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分の思いを無視して真葛が好き勝手に振る舞っていると考えたので。

イ 縁談を受けるか受けたくないかは真葛自身が決めるべきことと考えたので。

ウ 真葛のことをまったく考えないで初音が縁談を進めていると考えたので。

エ 実の妹のようにかわいいたく考えないで嫁入りさせたくないと考えたので。

オ 以前からなにかと初音が自分をないがしろにしていると考えたので。

(六) 傍線部 「それとこれとは、話が別だ」とあるが、「それ」と「これ」が指示しているものはそれぞれ何か。その答えとしてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 小笹汪斎が真葛の伯父弟子であるということと真葛が嫁入りすること。

イ 小笹汪斎が真葛の伯父弟子であるということと小笹家が真葛の嫁ぎ先にはうってつけだということ。

ウ 京都では医家同士の婚姻が多いということと小笹家が真葛の嫁ぎ先にはうってつけだということ。

エ 京都では医家同士の婚姻が多いということと真葛が嫁入りすること。

オ 小笹家は真葛の嫁ぎ先にはうってつけだということと真葛が嫁入りすること。

(七) 傍線部 「箸しほを握にぎりしめたまま目を伏ふせた」とあるが、真葛はなぜこのようにしたのか。その答えとしてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 縁談のことをあれこれと考えてぼんやりしてしまっただけ。

イ 強引に縁談を進める初音にどう断ろうかと考え込んでいた。

ウ 学問の世界に生きるか嫁入りするべきかと考え込んでいた。

エ 行方不明である父親のことをぼんやりと思いついていた。

オ 女子の幸せは子を産み育てることなのかと考え込んでいた。

(八) 空欄「A」をひらがな一字で、空欄「B」を漢字一字で、それぞれ自分で考えて補いなさい。

(九) 傍線部 「真葛は時にうらやましくも疎うとましくも感じていた」とあるが、初音のどのようなところをそのように感じていたのか。その答えとしてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 子供を産み育てることが女子の幸せだと信じ、真葛のあせりや苦しみをまったく理解しないところ。

イ 夫や子どもの息災だけを心の支えに日々を送り、男に混じって活躍する真葛を敵視しているところ。

ウ 生薬の栽培管理は自分が一番だと思い込み、自分の生きる世界に何の疑問も持っていないところ。

エ 天真爛漫で自分の思い通りに物事をすすめるが、まったく向学心というものを持っていないところ。

オ 女らしいばかりでなくからつとした気性だが、夫や真葛に対してだけは傲慢に振る舞うところ。

(十) 傍線部「真葛の焦燥や苦しみ」とあるが、それはどのようなものか。その答えとしてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 主婦として家事や育児をすることと学問の道を追い続けることとの両立を考え、焦燥や苦しみを感している。

イ 向学心を持っていない初音に、どうやって学問の奥深さを分からせようかと考え、焦燥や苦しみを感している。

ウ 未熟な自分がどうやって薬草の知識や調合の腕をみがいていこうかと考え、焦燥や苦しみを感している。

エ 如何に薬草の栽培に長けていようと、女性の幸せには無縁なのだと考え、焦燥や苦しみを感している。

オ 学問の世界は魅力的だが、所詮女の自分には踏み込めない世界なのだと考え、焦燥や苦しみを感している。

(十一) 本文の内容に合うものを、次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 初音は京女にはめずらしくからつとした気性で、夫や子供の息災だけを心の支えにして毎日を暮らしている。

イ 真葛の縁談話の相手、小笹玄四郎の父親、小笹汪斎は、元禁裏御典医である御園常尹の伯父弟子である。

ウ 真葛は思ったことを口に出せない気弱な性格なので、縁談話を強く断った際、周囲の者たちはびっくりした。

エ 真葛は結婚したいという強い願望を持っているが、自分の相手は絶対に自分で見つけたいと考えている。

オ 昔は、武家や医家の結婚は、当人同士は顔を見ることもなく、親類縁者の談合によって決められるものであった。

カ 真葛は、初音のように生きられれば楽になれると考え、最後には初音のような暮らしを強く望むようになった。

【問題は以上で終わりです】

(十)	(九)	(七)	(五)	(三)	(二)	(二)	①
					A	d	a
		(八)		(四)	B		
		⑦				e	b
(十二)					C		
I						しない	
		⑧				f	c
II							
			(六)				

(十二)	(九)	(八)	(五)	(三)	(二)	②
		A			a	
	(十)	B	(六)	(三)		
					b	
			(七)	(四)	め	
					c	
					d	
					e	

得点	
受験番号	

- (一) a 作業 b 残念 c 推測 d 調子 e 達 f 正統派 2点 x 6
- (二) A ウ B 才 C イ 3 x 3点 (三) ウ 4点
- (四) ア 4点 (五) 仮説に当てはまる 3点 (六) ウ 3点
- (七) ウ 3点
- (八) 質問者 実験(観察) 3点 x 2 (九) ウ 4点 (十) イ・ウ 3点 x 2
- (十一) B・C A・D 3点 x 2 (それぞれで完答)
- (一) a 独断 b 務め c 先代 d 消息 e 不思議 (10点)
- (二) ウ (三) ア (四) 才 (五) イ (六) 才 (七) エ (八) A へ B 島 (4点)
- (九) ア (十) ウ (十一) ア・才 (6点) あとはすべて5点